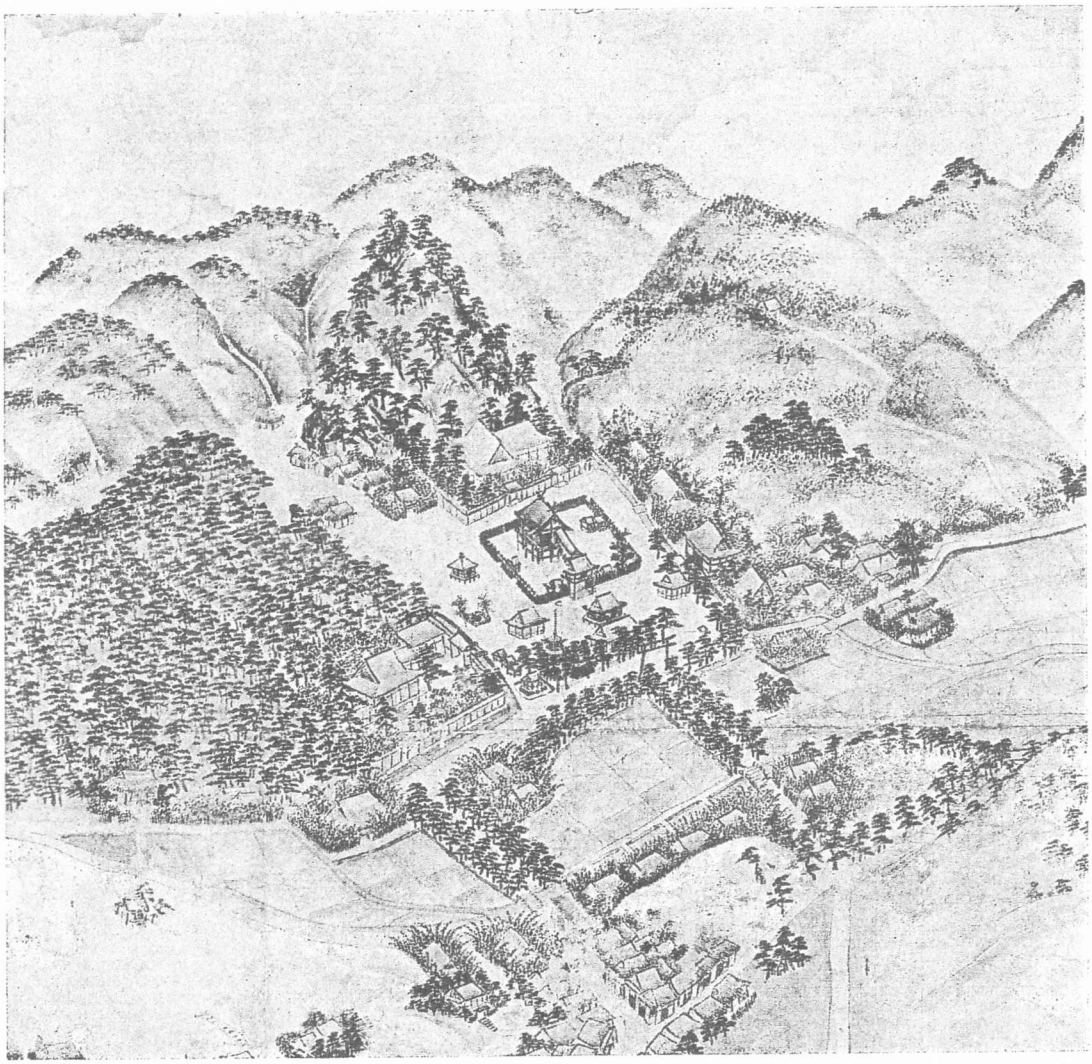
秋の出雲石見一泊旅行

－古代のロマンと元寇の軌跡を求めて－



紙本着色杵築大社近郷絵図（県指定文化財　北島英孝氏所蔵）

主催　備陽史探訪の会

平成9年10月11日（土）～12日（日）

出雲石見一泊旅行探訪コース

《第１日》

・福山駅北口（６時３０分集合。集まり次第に出発）Ｒ２からＲ１８４を経て三次へ。
・吉舎町（Ｒ１８４沿線、トイレ休憩１０分）三次からＲ５４へ。
・赤名峠を通過（Ｒ５４沿線、車中解説）
・道の駅「掛合」（Ｒ５４沿線、トイレ休憩１５分）
・三刀屋城前を通過（Ｒ５４沿線、車中解説）

★神原神社古墳（見学時間約３０分）

・加茂岩倉遺跡入口を通過（Ｒ５４沿線、車中解説）
・宍道湖から松江市内へ（Ｒ９経由して市内を通過）

★古墳の丘古曽志公園（見学と昼食約１時間３０分。Ｒ４３１経由で西行）

★一畑薬師（見学時間約４０分。Ｋ２３経由）

★鰐淵寺（駐車場から根本堂まで徒歩約２０分。見学時間約３０分。Ｋ２５０経由）

★小早川正平の墓（見学時間約２０分。Ｒ４３１沿線）

★出雲大社（見学時間約４０分。初日最後の探訪地）

・宿舎「眺瀾荘」（午後５時到着。夕食および宴会、飲み足らない人は本部で酒盛りを）

《第２日》

・朝食前に有志で日御碕神社見学。
・「眺瀾荘」発（午前８時）
・昼食弁当受取りのために「出雲総合地方卸売市場」へ

★大森代官所跡　石見銀山資料館（見学時間約３０分）

★大森町並散策（城上神社・羅漢寺他は目的地不定）

★山吹城登山（登山時間約４５分。山頂で昼食１時間。下山約２５分）

★龍源寺間歩（間歩は銀鉱石採取の坑道。見学時間約２０分）

・石見銀山発（午後３時）
・瑞穂町（高橋氏の本拠、二ツ山城前通過。車中解説）Ｋ３１からＲ２６１へ。
・道の駅「瑞穂」（トイレ休憩１５分）

★順庵原１号墓（見学時間約１５分。最後の探訪地。Ｒ２６１沿線）

・大朝ＩＣから浜田自動車道→中国土自動車道→広島自動車道→山陽自動車道
・山陽自動車小谷ＳＡ（トイレ休憩１５分）
・福山駅北口着（午後７時ころ）

企画・資料作成　備陽史探訪の会旅行委員（中村勤史・馬屋原亨・佐藤秀子
平田恵彦・木下和司）

★参考資料の作成は出内博都さんです。

神原神社古墳

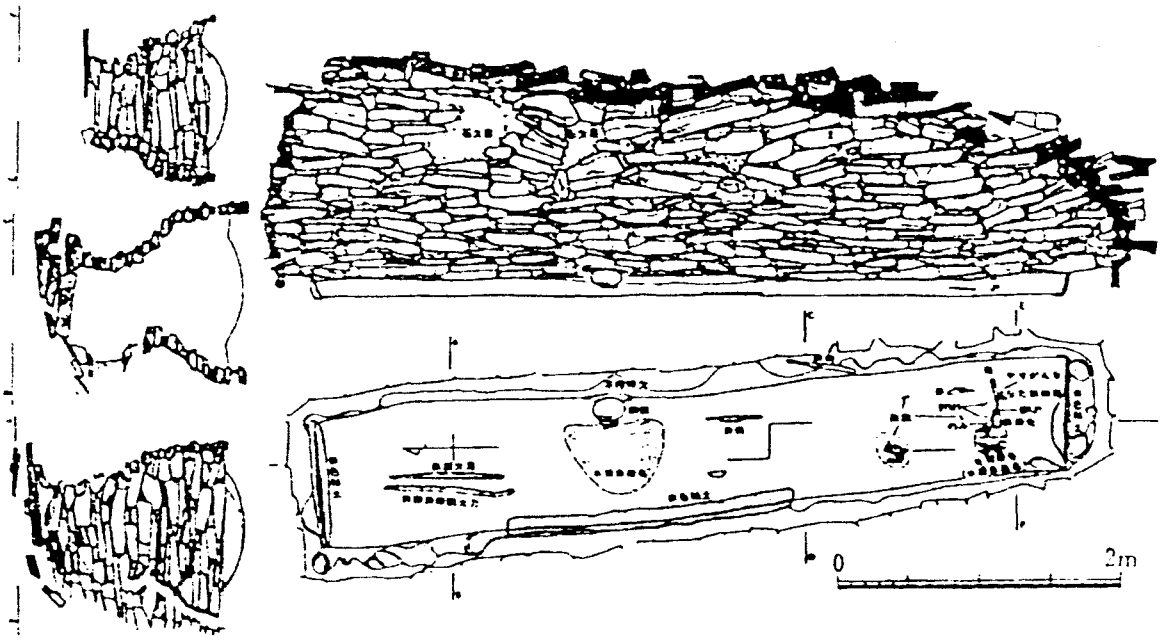
島根県大原郡加茂町神原にあり、斐伊川の支流、赤川左岸の微高地の先端部に立地していた。一辺２５ｍ×２９ｍの方墳で、一部に周掘が認められ、高さは５ｍ以上あったと推定されている。

この古墳は墳丘の上部に神原神社の本殿が建っていたので、古墳の存在は古くから知られていたが、調査の手は加えられなかった。しかしその後、水害防止のため赤川の川幅拡張工事が行なわれることになり、神社は新たに築造される堤防の範囲にあたるため約５０移転されることになった。このため昭和４７年(１９７２)夏に事前緊急調査が実施され、長さ５．８ｍ、幅約１ｍの割石小口積みの竪穴式石室が発見された。石室内には割竹形木棺の痕跡があり、副葬品には「景初三年」の銘をもつ（いわゆる紀年鏡）三角縁神獣鏡１面をはじめ、多くの遺物が出土した。

この年号をもつ鏡の出土は全国でもわずか２例で、もう一面は大阪府の和泉黄金塚古墳出土のものである。ただし、黄金塚の鏡は平縁の神獣鏡で、三角縁神獣鏡としては神原神社古墳のものが唯一である。『魏志』倭人伝によれば、景初３年(２３９)は卑弥呼が魏に遣いを送った年だが、この鏡の存在が『魏志』倭人伝の記述を裏づけ、かつ邪馬台国畿内説の有力な根拠となっていることは有名である。

銅鏡以外の出土遺物は、素環頭太刀・鉄剣・鉄鏃・鉄鏃・鉄鎌・鉄斧・鑿・錐・鉋・針などがある。また、石室外の墓壙内からは、壺５と朱塊を埋納したピット（穴）が発見された。さらに、石室の蓋石上部からも多数の壺と器台形の土器が出土し、葬送に関わる供献土器群とみられる。

神原神社古墳は島根県最古の古墳の一つとして重要視され、調査後、石室のみ移転後の神社の隣接地に復原された。



古曽志大谷１号墳

島根県松江市古曽志字大谷にある。宍道湖北願の標高約４０ｍの丘陵上に位置する前方後方墳である。昭和６１年（１９８１）に島根県教育委員会が発掘調査した。

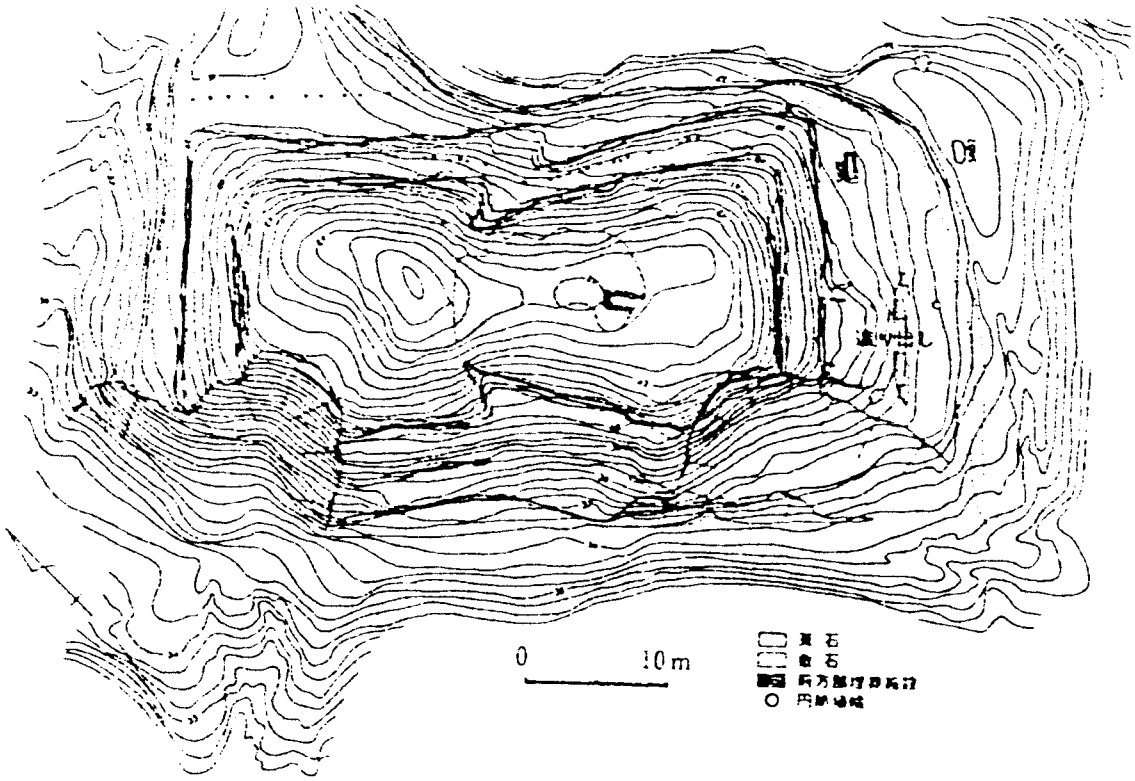
主軸長 ４５．５ｍ、前方部推定最大幅２９ｍ、後方部推定最大幅２６ｍを測る。墳丘は２段築成で、高さは前方部・後方部ともに約５ｍであるが、後方部は流出がみとめられるので元々はもっと高かったものと思われる。

前方部の先端部には長さ ５．５ｍ、幅６．５ｍ～９．５ｍ、高さ ０．４ｍの方形台状の造り出しが付設されている。造り出しの肩部には朝顔形埴輪・円筒埴輪が樹立され、頂部からは丹塗りの土師器高坏・須恵器（壺・子持壺・筒形器台・高坏・甕・坩など）が故意に破砕されたと考えられる状況で出土した。

墳丘斜面には貼石状の葺石が認められ、前方部頂には拳大の円礫が敷かれていた。墳頂部・段平担面・前方部墳頂肩付近には、円筒埴輪が立て並べられていた。

主体部は前方部で木棺の周囲を拳大の円礫で囲んだと思われる施設（長さ２．９ｍ以上、幅 １．９ｍ）が確認され、鉄刀１・刀子２・鉄斧１・鉄鏃１束（３９本）・が出土した。後方部では未確認であるが、流出土中より副葬品と思われる鉄刀片・鉄鏃片が出土した。出土遺物や墳形などから５世紀末ごろの築造と考えられる。

※現在、一畑電鉄「朝日ヶ丘」駅の東に「古墳の丘古曽志公園」が建設され、その一郭にこの古墳は復原されている。総面積２万３０００ｋｍ² の広い敷地内には、多くの古墳や野外ステージ、野外展示広場、県立埋蔵文化財センターなどの文化施設がつくられ、島根県の歴史や文化遺産に触れることができる。ここからは宍道湖が眺望でき、その眺めは素晴らしい。



一畑寺（一畑薬師）　〒692　島根県平田市小境町８０３

臨済宗妙心寺派、山号は医王山。　本尊は釈迦如来。開山は石雲本竺。

寺伝によれば、寛平６年（８９４）漁師坂野余市なるものが、日本海岸の赤浦灘（平田市佐香浦）の海中から一躯の薬師如来像を拾い、霊夢により当地に薬師堂を建立し安置した。余市も出家して補然と名乗り、寺は医王寺と号し、天台宗に属したという。おそらく平安時代後期には薬師信仰と修験の霊場として繁栄したと思われ、１２の坊舎があったと伝えられる。

その後、鎌倉時代後期にいたって、石雲本竺が再考し、臨済宗の禅寺に改め、寺号も常（成）徳寺とした。正中２年（１３２５）南禅寺派となったが、中世後期から武将の外護をえ、『雲陽志』（享保２年〈１７１７〉）によれば、尼子・毛利・堀尾・松平各氏の造営修復の棟札が存在していたという。

「一畑寺文書」によれば、元亀３年（１５７２）には成徳寺であるが、天正３年（１５７５）には市畑寺となっているので、この間に寺号の変更があったものと思われる。寛政２年（１７９０）妙心寺派に転派し、現在にいたっている。

薬師堂の薬師如来はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が「この一畑の如来は、どちらかというと、身体の救癒者、盲人に視力を授ける仏とし、この世に顕現している（『日本瞥見記』）」と記しているように、病気の効験あらたかな薬師として古くから広範な信仰をえていたが、とくに「眼のお薬師さん」として有名である。

「一畑寺文書」によれば、天正５年（１５７７）１０月、三刀屋城主三刀屋久扶が眼病治癒の報謝として、三貫文の地を寄進しているから眼病治癒の信仰は少なくとも戦国時代までさかのぼることができよう。寛政元年（１７８９）の「妙心寺派下寺院帳」によれば、末寺９ヵ寺とある。

この薬師信仰は各地に一畑講という諸集団を生んだが、現在は全国５０余の分院を通じて一畑薬師教団に組織され、当時はその本山である。

寺宝には、絹本着色阿弥陀三尊像（県重文）、紙本墨画着色書院障壁画８面（県重文）などがある。また、文化年間（１８０４～１８１７）の建築といわれる書院と茶室も有名である。なお、室町戦国期の文書を多数所蔵しているが、残念ながら公刊されていない。

八騎塚（小早川正平主従の墓）　平田市美談町

吉田郡山城合戦（天文９年～１０年〈１５４０～４１〉）で破れた尼子氏を見限り、大内方につく安芸・備後・備中・石見などの国人衆が激増し、さらに巨星尼子経久が没したのを機に大内義隆は出雲遠征を敢行する。第１次月山富田城の戦い（天文１１年～１２年〈１５４２～４３〉）である。

しかし、富田城の守りは固く、戦いが長期化するにつれ、遠征軍に倦怠の色が漂い始め、大内方にあった三沢・三刀屋・本城・吉川・山内氏らが再度尼子方に寝返った結果、形勢は一気に逆転、ついに義隆は撤退を決意する。その退却戦の最中、沼田小早川家（惣領家）の当主小早川正平はわずか２１歳で討ち死する。

正平は宍道湖北岸を平田から美談（みだみ）へ向けて家臣７人とともに鵯巣（とびのす）川を越えて大内軍本体に合流しようとしたが、落ち武者狩りの一揆勢に追撃され、あえない最期を遂げたのである。現在、平田市美談町の興源寺（小早川隆景の建立という）のすぐ近くに、小早川正平主従の墓と伝えられる八騎塚（宝篋印塔１基、他は五輪塔）が残っている。

こうして正平を失った沼田小早川家は、その子又鶴丸が家督を相続し、繁平と称して当主となる。しかし、不幸にして繁平は眼病を患っており失明、家事を采配できないため、竹原小早川家の隆景を繁平の妹と結婚させて当主に迎えることなった。ここに両小早川家は統合されることになった。その後、隆景は吉川元春とともに毛利両川体制の一翼を担い、大活躍することはあまりにも有名である。

鰐淵寺　〒691　島根県平田市別所町１４８

天台宗、山号は浮浪山。延暦寺の最初の末寺という。本尊は千手観音菩薩。

寺伝によれば、智春という僧が山内の浮浪の滝で推古天皇の眼病平癒を祈願し、効験があったので推古２年（５９４）勅願寺として一宇を建立されたのに始まるという。そのさい、智春がたきつぼに仏器を落としたところ鰐がくわえて浮かびあがったので「浮浪山鰐淵寺」という寺号になったと伝えられる。しかし、天平５年（７３３）に成立した『出雲国風土記』には記載されてないところをみるとこの寺伝は信じがたいが、浮浪の滝を中心とた修験信仰は既に奈良時代に行なわれていたと思われる。治承３年（１１７９）ころ成立した『梁塵秘抄』に「聖の住所は何処何処ぞ、箕面を勝尾よ播磨なる書写の山、出雲の鰐淵や日の崎、南は熊野の那智とかや」という今様があるので、少なくとも平安後期には、鰐淵山は修験道の道場として中央にも知られるほどであったのは確かである。

当寺が蔵王・観音・薬師の三元信仰を統合して、伽藍をもつ寺院、すなわち鰐淵寺として成立するのは平安後期と考えられ、ほぼ同時期に比叡山の天台系列に入ったと思われる。鎌倉時代には、国富・漆治二郷など広大に寺領を有し、堂塔伽藍も整備され、出雲大社の別当寺にもなって大いに繁栄した。僧兵も擁していたので、南北朝には南朝・北朝両勢力に別れ、また戦国時代にはいち早く毛利方につくなど、俗界への影響力も大きかった。他方、出雲地方の学問の中心でもあり、鎌倉時代の然阿良忠（浄土宗）、室町時代の夢巌祖応（京都五山禅僧）などが若いころここで学んだ。

宝暦９年（１７５９）「比叡山延暦寺本末帳」・天明６年（１７８６）「出雲国天台宗寺院名前帳」によると、衆徒１２ヵ寺、末寺６ヵ寺とあり、天保５年（１８３４）「扶桑台宗本末記」によると、黒印寺領３００石、衆徒１２ヵ寺、末寺６ヵ寺（雲州５・石州１）とある。排仏毀釈の打撃を受け、現在では松本坊（本坊）・是心院の２坊を残すのみである。

鰐淵寺は文化財の宝庫で、銅造観世音菩薩立像２躯（重文）のうち１躯には、「壬辰年五月」（持統６年〈６９２〉）の銘があり、白鳳時代の地方仏として貴重である。浮浪の滝口、蔵王窟から出土した石製経筒（重文）には、仁平元年（１１５１）の願文銘文が刻んであり、修験信仰を知る上で重要である。他には重要文化財として、絹本着色一字金輪曼陀羅図、絹本着色毛利元就像、寿永２年（１１８３）銘の銅鐘、紙本墨書後醍醐天皇願文などがある。これ以外に県指定文化財も多数所蔵されている。

鰐淵寺の古文書は中近世文書合わせて４６０点に及ぶ。子のうち、後醍醐天皇願文・名和長年執達状・頼源僧都文書（以上重文）後村上天皇願文・徳川家康起請文（以上県指定）を除く４５６点（４４６通と１０冊）が一括県文化財指定となっている。これらの文化財は山内の修蔵庫に納められているが、毎年秋の曝涼の時だけ公開される。

出雲大社

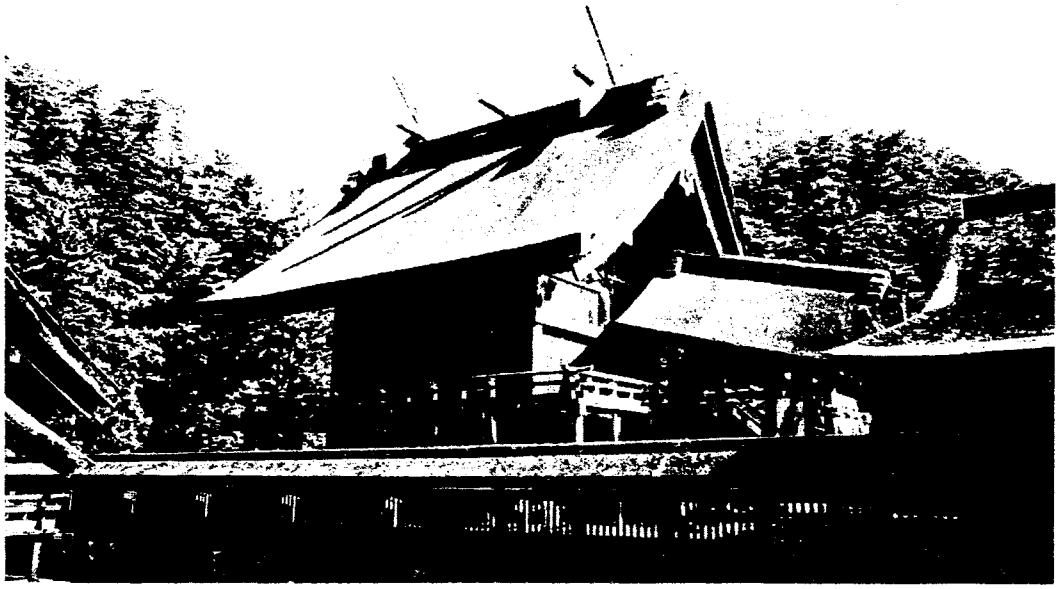
千家 和比古
（出雲大社禰宜）

①**鎮座地**　島根県簸川郡大社町宮内
（電話）〇八五三・五三・三一〇〇
（交通）一畑電鉄出雲大社前駅より徒歩、JR山陰本線出雲市駅よりバス。
②**祭神**　大国主大神。
③**社格**　旧官幣大社。
④**由緒**　「天下無双の大厦、国中第一の霊神」、平安末期の官宣旨等に散見する一文である。出雲大社を、これほどうまく端的に表した言葉はない。一般に神宮と言えば伊勢神宮、大社と言えば出雲大社の意であった。『延喜式』には「名神大」に唯一「大社」と記す。また古来、種々の称号で讃仰された。天日隅宮、天日栖宮、所造天下大神宮、杵築大社などである。

祭神大国主大神は、素戔嗚尊の神裔として大己貴神、葦原色許男神、大物主神、八千矛神、宇都志国魂神、所造天下大神、国作之大神など様々の神名でも敬仰されている。

出雲大社の祭神・社殿造営・祭祀について『古事記』『日本書紀』は、ことに神代、格別と言って良いほどに語る。兄八十神、素戔嗚尊による様々の試練（袋背負い・手間山の焼石・茹矢・蛇の室・呉公・蜂の室・大野の鏑矢・八田間の大室屋）を経て少彦名神と国づくりに尽され、白菟を救われるなど療病・禁厭の法、また温泉、酒造を教えられ、やがて天孫降臨に際して皇孫に国土を奉還された。かくして幽顕分任の神勅により、大神は幽れたる神事の世界、見えざる霊的世界を主宰されることになり、「国中第一の霊神」として宮居に隠り鎮り坐して、その祭主に天穂日命、すなわち出雲国造（出雲大社宮司）の祖神が任じられた。創建・創祀については、具体的歴史年代を言うは難しい。研究者間でもほぼ四世紀～七世紀代に見解が分れる。しかし、崇神天皇紀、垂仁天皇紀・記には神宝検校など祭祀の存在を言う記事がある。

以後も国史、古典に大社に関連する記事は多い。中でも重要なのは、奈良・平安期の出雲国造のみによる神賀詞奏上である。天皇即位、国造（代替り）補任、遷都に関わって朝廷にて天皇の大御世を寿ぎ行われた。いわば中臣氏の天津神の賀詞に相対する、大国主大神をその身に承当しての国津神の賀詞であった。大神が国津神の代表神格、神事の主宰神として坐すことに拠る。周知の陰暦十月神在月の斎神事、神集いの信仰の縁由でもあろう。それ故に近世前期、幕政による吉田家を媒体とした神社統制下においても、出雲（大社）は対象外とする霊元天皇の綸旨「永宣旨」が出雲国造に下賜されるのである。かくして朝廷はじめ諸将の崇敬も篤く、古代以来、社領の寄進、奉幣、祈願も多くうけた。後醍醐天皇が倒幕に宸筆をもって神剣を勅望されたのは著名である。中世末、社領も五四五〇石に達し、ほかに七浦などを所有した。



出雲大社社殿

他方、ことに平安末期以降、福の神、縁結びの神として稀なる笑顔の御神像のダイコクさまと親しみをもって信仰された。全国の大小数多くの社に祀られ、民俗事例でも霜月収穫祭に件の御神像を箕の中に奉安して刈り取った初穂を中に供えお祭りするなど私的宅斎も多かった。このような信仰の広がりに御師の果したつとめがある。やがてその広がりは明治期に至り、第八十代出雲国造、大宮司千家尊福によって出雲大社敬神講として結ばれ、今の出雲大社教へと展開した。

⑤**建造物**　本殿の様式は大社造。切妻、妻入り、平面正方形を呈し、殿内中央に岩根御柱（心の御柱）をもつのが特徴。神宮の神明造と並記される古様の神社建築であるが、対称的形態である。特に大社の建築は「天下無双の大厦」と言われる如くに巨大性が歴世指摘され、社伝、古典には古代その高さは奈良大仏殿よりも高く十六丈（約四十八メートル）あったという。傍証もあって、その蓋然性が建築史家により説かれる。寛文造営（一六六七）より今日の如き高八丈（約二十四メートル）、方三丈六尺の制となり、現在の本殿は延享造営（一七四四）時のもの。他に境内境外に二一の摂末社、祭祀対象の御井三と杜二がある。

⑥**神事**　年中の恒例祭祀は大小数多きに及ぶ。例祭（大祭礼）は五月十四日～十六日。もと三月会（陰暦三月一～三日）と称し、中世には「山陰無双の節会、国中第一の神事」と俗に千石千貫をもって執行したと伝える。一之祭は勅使参向のいわゆる勅祭である。正月一日大御饌祭（寝籠り神事）、六月一日涼殿祭（真菰の神事）、八月十四日神幸祭（身逃の神事）、同十五日爪剝祭、陰暦十月十日～十七日神迎祭、神在祭、神等去出祭。十日夜、聖地稲佐浜にて全国八百万神々をお迎えし、本社東西の一九社を宿所、摂社仮宮を神議処として神事主宰神の御許での神議りの斎神事である。十一月二十三日古伝新嘗祭。出雲大社の祭主たる国造（宮司）の祭りで、浄闇の中、相嘗などの諸儀を通じ祖神の霊威を戴く、国造代替りの火（霊）継ぎ神事の後の年毎の国造の霊威蘇生のための神事である。

⑦**宝物・古文書**　国宝＝本殿、秋野鹿蒔絵手箱。重文＝後醍醐天皇宝剣勅望綸旨など。

⑧**参考図書**　『出雲大社』（学生社）など。

日御碕神社 〒699-07 島根県簸川郡大社町日御碕に鎮座。

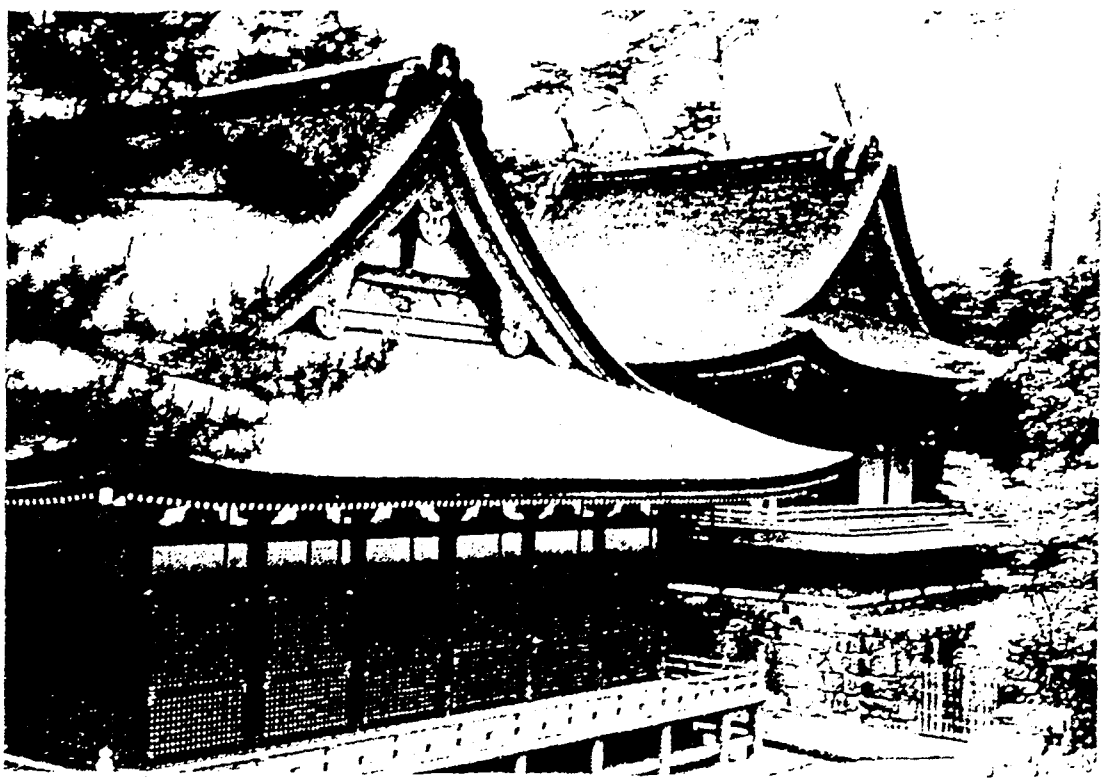
旧国幣小社。日御碕神社は上下２社に分かれ、上の宮を「神の宮」、下の宮を「日沈宮」と称する。上の宮は神素盞嗚尊を主祭神とし、３柱の神を配祀する。下の宮は天照大御神を主祭神とし、５柱の神を配祀する。

本社は奈良時代に入ってから史上に現われる。まず『出雲国風土記』（天平５年〈７３３〉）に「美佐伎社」と見え、『延喜式』神名帳（延喜５年〈９０５〉編纂開始、延長５年〈９２７〉完成）には「御碕神社」とあり（いわゆる式内社）、小社に列して祈年の国幣に預かった。

このように朝廷の尊崇を受けたほか、鎌倉時代以降、幕府の崇敬を受けて社殿の修復が行なわれ、近世初頭には堀尾氏が７８０石の神領を寄進した。江戸幕府もまた６００石を社領を安堵し、出雲大社に次ぎ山陰における有力な大社である。松江藩主松平氏も以前と変わらぬ尊信を傾け、社運は盛んであった。明治４年（１８７１）国幣小社に列せられた。

現在の社殿は徳川家光の命により、松江藩主京極忠高が着手し、正保元年（１６４４）京極氏改易後に松江藩主となった松平忠政の代に完成した。各建物とも細部の様式が優美で、桃山時代の面影を残した江戸時代初期の遺構として重要文化財に指定されている。

例祭は８月７日。春祭りは神の宮、秋祭りは日沈宮中心の形態をとる。古伝神事として旧正月５日の和布刈（めかり）神事、大晦日の神剣奉天神事は著名である。社宝としては国宝白糸縅甲冑をはじめ、甲冑・刀剣などの美術工芸品が多い。



下の宮本殿（左）と幣殿拝殿（右）

石見銀山　島根県大田市大森町に所在

近世の金銀開発の先駆となった戦国時代からの代表的な銀山であり、同時代では世界最大の銀山である。１４世紀初頭、仙ノ山から自然路頭の銀石を採取していたといわれるが、銀山開発が確実になるのは１６世紀前半ころからである。

伝承によれば、筑前博多の回船問屋神谷寿禎が、邇摩郡仁摩町宅野の沖合を航行中に、南の山が輝いて銀の気が立っているいるのを見つけ、簸川郡大社町鷺浦の銅山主三島清右衛門とともに、大永６年（１５２６）銅山開発のために入山したのが仙ノ山であるという。その後、神谷寿禎は天文２年（１５３３）に新技術をもった吹工を伴って再度来山し、銀の精錬に成功した。

戦国期には大内・尼子・小笠原・毛利各氏らによって銀山争奪戦が反復された。当初、銀山の押さえとして、仙ノ山の西南に矢滝城があったが、後に仙ノ山の正面に山吹城が築かれた。以後、この山吹城を中心に幾度と泣く戦いが繰り広げられた。現在の山吹城の遺構は主に毛利氏によるものである。

銀山争奪戦は最終的に毛利氏が勝利した。すなわち、弘治２年（１５５６）吉川元春が石見に入って銀山を領し、その後尼子氏が銀山を奪回したが、永禄５年（１５６２）毛利氏が再びこれを確保し、同７年（１５６４）幕府と朝廷に対し、御料所として献じ、その運上を貢納した。天正１１（１５８３）毛利氏が豊臣秀吉に帰服し、秀吉は銀山へ目付を下向させ、運上を徴納した。関ヶ原の戦い以後、銀山と銀山領の石見の一半は天領となり、慶長６年（１６０１）大久保長安が奉行となって邇摩郡佐摩村大森に治府が置かれた。

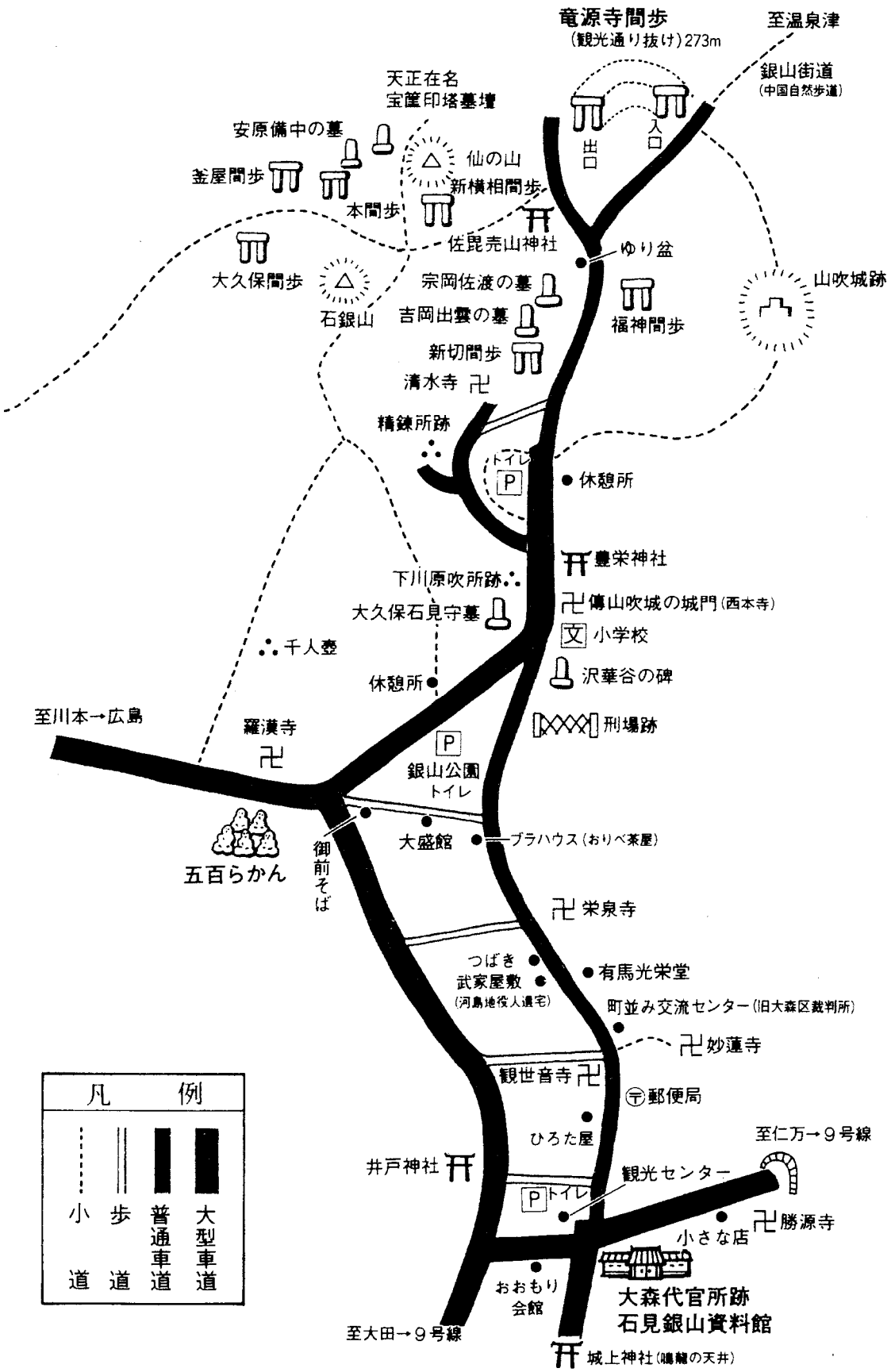
銀山の表入口の蔵泉寺口を入ると、銀山町があり、西端の坂根口まで続いた。東西の長さ３５町（３．５㌔）、この間の谷々も町を形成したという。これらの谷は昆布山・栃畑・大谷・休谷・清水・本谷・石銀の七谷をいう。長安が奉行になったころは七谷はもとより銀山地区外の柑子谷の疏水坑が掘られている。１６世紀後半に産銀量は１年に数百貫以上もあったが、長安が奉行になってからさらに激増し、山師安原知種の稼業した本谷の釜谷間歩は、慶長６、７年（１６０１～０２）ころの運上銀が１年に６００貫にも達したという。しかし、寛永以後は次第に衰えていき、１６世紀末には３５０貫余、１７世紀初頭には１８０貫余、その後は１００貫前後を推移し、幕末のころになると約４０貫にまで落ち込んだ。なお、１８世紀以降は銅も産し、南蛮吹による抜銀銅を大坂へ送った。天保元年～１４年（１８３０～１８１３）の出銅高は計２０２７８０斤であった。

近世初期の盛山時には、一定期間の稼業に対し、運上高をあらかじめ契約する運上山と公納分・山主分を一定歩合で分ける荷分（堀分）山の両方が行なわれた。前述の釜屋間歩の場合は運上山である。しかし、その後は荷分山が主流となった。山師（主）の稼業には佐渡と同じく御直山と自分荷山がある。御直山は公費の助成があり、自分荷山は山師持山ともいい、山師の全負担である。なお、石見では大内・尼子・小笠原・毛利各氏の争奪時代に銀山衆と呼ばれる稼業者すなわち山師がすでに存在していた。

天文年間（１５３２～１５５４）から日本銀の海外輸出が始まるが、１６世紀後半までは国内では石見銀山以外の銀開発はまだ多くなく、輸出銀の大部分は石見銀とみてよい。天文２年（１５３３）の銀精錬は朝鮮から伝えられた中国の方法で、銀鉱に鉛・鉛鉱を合わせて荒吹して含銀鉛を造り出し、これを灰吹床で藁に包んで過熱し、鉛を藁灰に吸収させて銀だけを抽出するので灰吹法と呼ばれ、近世の銀精錬はみなこれによった。

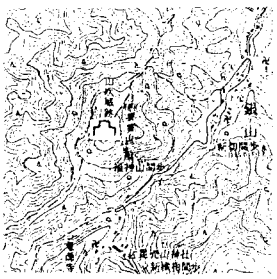
明治維新後、銀山は民間所有となり、明治６年（１８７３）旧松江藩家老安達総右衛門が経営を試みたが、資金難のためから失敗。明治２０年（１８８７）に大阪の藤田組（現在の同和鉱業の前身）の所有となり、新技術の導入によって明治３８年（１９０５）ころは銅（銀含有）を１ヵ月に３１３０貫を出した。しかし、湧水排出費用などで採算が合わなくなり、大正１２年（１９２３）にはついに休山となった。

昭和４４年（１９６９）、山吹城址・釜屋間歩など７ヵ所の間歩などが一括して国指定史跡となった。多くの間歩の中で、現在、龍源寺間歩が唯一一般公開されている。


竜源寺間歩
(観光通り抜け)273m
至温泉津
銀山街道
(中国自然歩道)
入口
出口
天正在名
宝筐印塔墓壇
安原備中の墓
仙の山
釜屋間歩
新横相間歩
本間歩
佐毘売山神社
ゆり盆
大久保間歩
宗岡佐渡の墓
山吹城跡
石銀山
吉岡出雲の墓
福神間歩
新切間歩
清水寺
精錬所跡
トイレ
P
休憩所
豊栄神社
下川原吹所跡
大久保石見守墓
傳山吹城の城門(西本寺)
小学校
千人壺
休憩所
沢華谷の碑
至川本→広島
羅漢寺
刑場跡
P
銀山公園
トイレ
大盛館
ブラハウス(おりべ茶屋)
五百らかん
御前そば
栄泉寺
つばき
武家屋敷
(河島地役人邸宅)
有馬光栄堂
町並み交流センター(旧大森区裁判所)
妙蓮寺
観世音寺
郵便局
ひろた屋
至仁万→9号線
井戸神社
観光センター
P
トイレ
勝源寺
小さな店
おおもり
会館
大森代官所跡
石見銀山資料館
至大田→9号線
城上神社(鳴龍の天井)
凡例
小道
歩道
普通車道
大型車道

山吹城（やまぶきじょう）

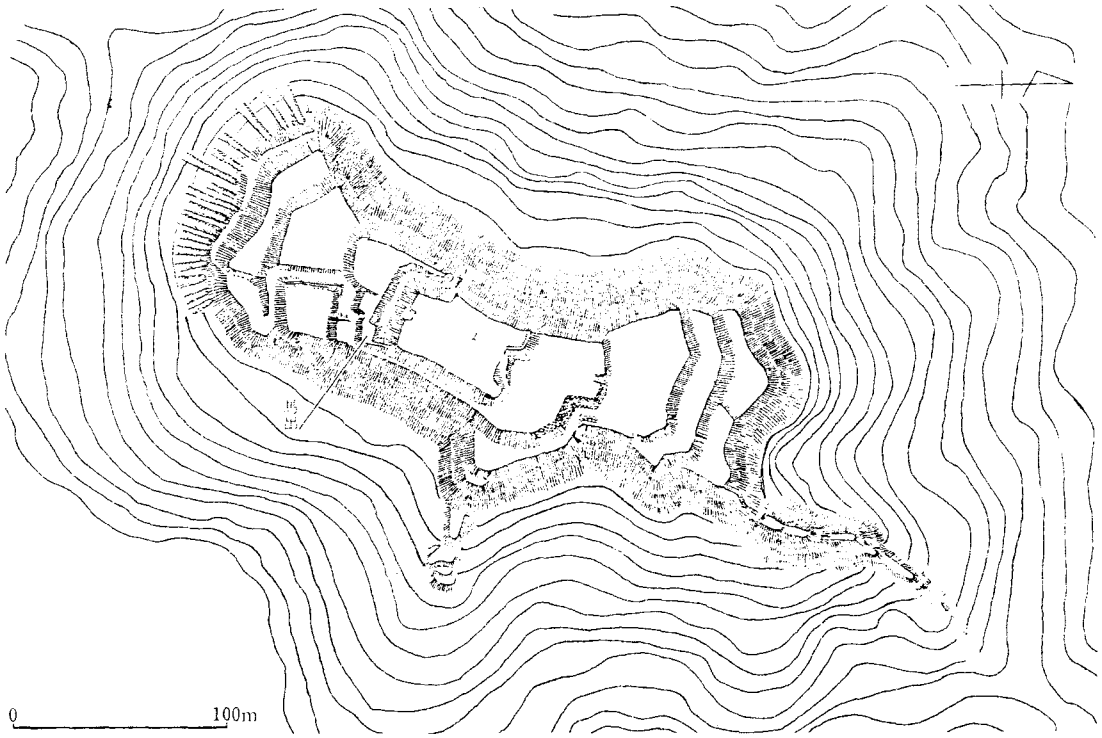
①大田市大森町銀山 ②銀山城 ③延慶年間か ④天文～永禄年間 ⑤戦国時代末期 ⑥慶長五年 ⑦大内氏、小笠原氏、尼子氏、毛利氏 ⑧山城 ⑨石垣・空堀・竪堀 ⑩三八〇m×七〇m ⑪標高四一四m、比高二一〇m ⑫国指定史跡 ⑬「銀山日記」「村差出明細帳」「山吹古地図」



山吹城は、石見銀山で知られる銀山川峡谷の西北、周囲の峰々から屹立して聳え立った要害山々上を中心にして築かれていた。

城の歴史は、鎌倉時代末期の延慶年間（一三〇八―一一）、大内氏の銀山発見とともに始まるわけだが、山陰の古戦史の中でこの城が特にクローズ・アップされてくるのが、戦国時代の中期以降、大内、尼子、毛利氏によって繰り広げられる銀山争奪戦によってである。元来大内氏の城だった山吹城も、出雲の尼子氏の侵入、地元の豪族小笠原氏の台頭などによって、天文年間の初頭その領有権が三氏の間を往復する。天文二十年（一五五一）に大内氏が滅びると、今度は尼子氏と毛利氏との間で争われることになり、弘治二年（一五五六）、永禄元年（一五五八）、同三年などに城をめぐって激しい攻防戦が展開される。しかし最終的には尼子氏を滅ぼした毛利氏の所有が確定し、関ケ原合戦で毛利氏が石見を失うまでその支配が続く。

城は屹立した山頂部に主郭（五〇m×二五m）を置き、その南と北に階段状に曲輪を配置する縄張を取っている。主郭の南側は山城にしては大規模な空堀（深さ七m・幅一四m）を巡らし、その堀の東端には小型の馬出が設けられている。城の南斜面はかなりの急傾斜なのに、合計一六本もの竪堀が連続して構築されている。この方面は何回かの攻防戦の時攻撃にさらされたことがあり、その経験上、おそらく毛利氏によって（毛利氏築城の勝山城にもこの施設が見られる）造営されたと見ることができる。また北方の曲輪群に見られる石垣（主郭の次の曲輪のものが顕著）も毛利氏の手によって築造されたと想像される。このように城全体の縄張も、毛利氏によって改修が加えられた可能性が十分考えられ、その時期は毛利氏が最終的にこの城を領有した時であろう。



山吹城図（三島正之作図）

順庵原１号墓　島根県邑智郡瑞穂町大字上亀谷

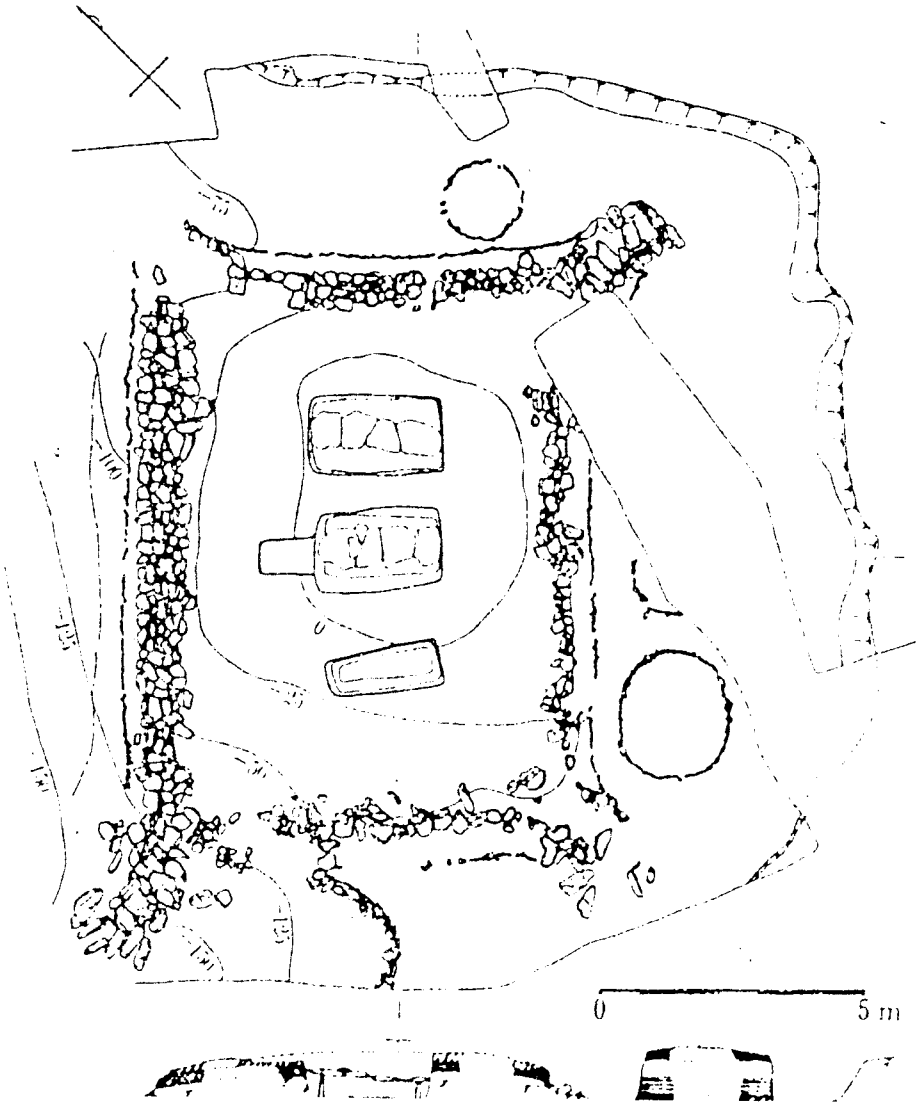
出羽川の河岸段丘縁端部に位置する四隅突出型墳丘墓である。昭和４２年と４４年（１９６７と１９６９）に門脇俊彦氏が発掘調査した。

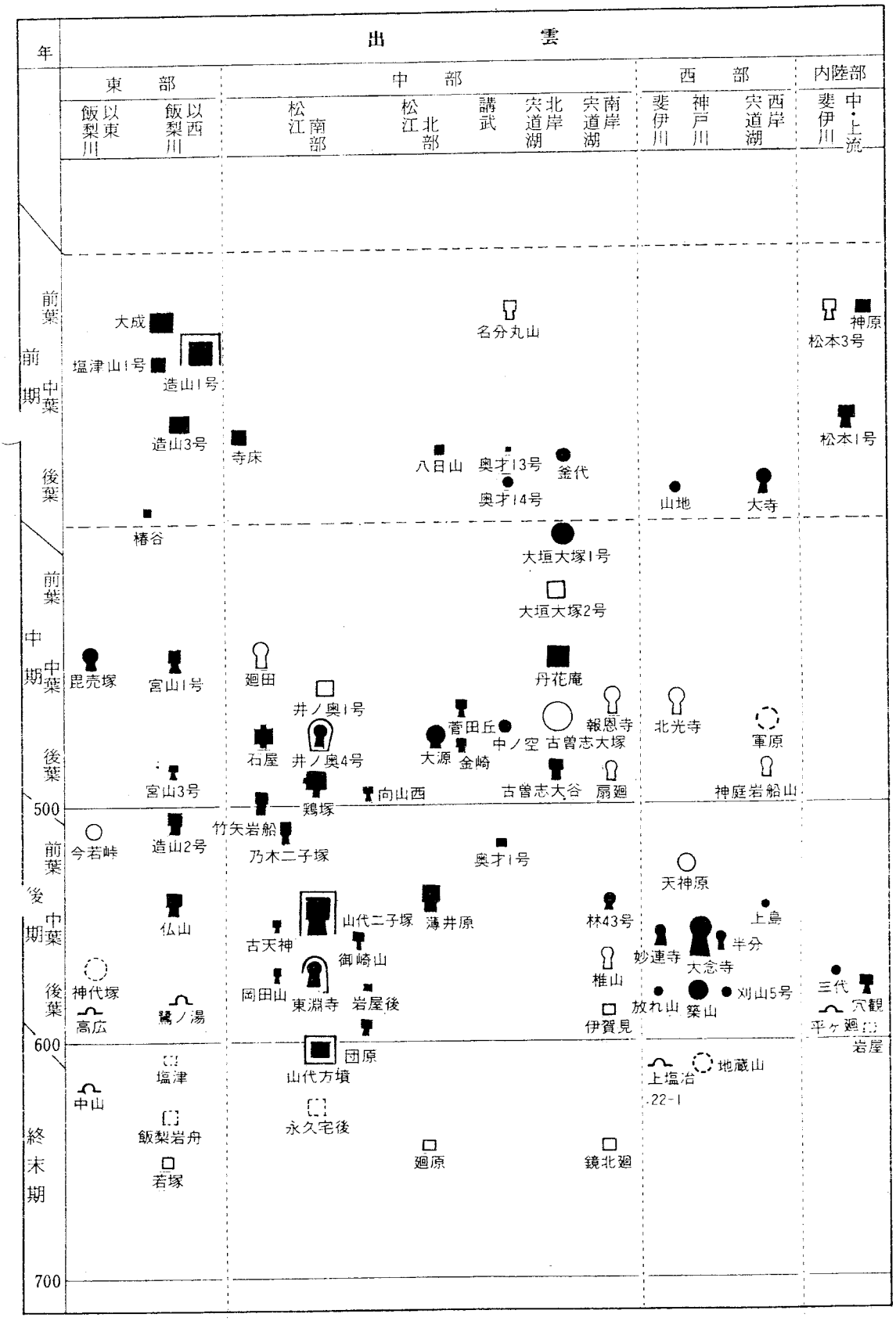
墳丘は８．２５ｍ×１０．７５ｍ、高さは１ｍ余りで、墳丘斜面には河原石を葺き、四隅には突出部をもつ。残存状況のよかった東隅の突出部は、河原石を並べた長さ２．２５ｍ、幅　１．２５ｍの長方形を呈し、内側に偏平な河原石を敷いている。墳裾から外側１０㎝～５０㎝の場所には棒状列石が延びている。

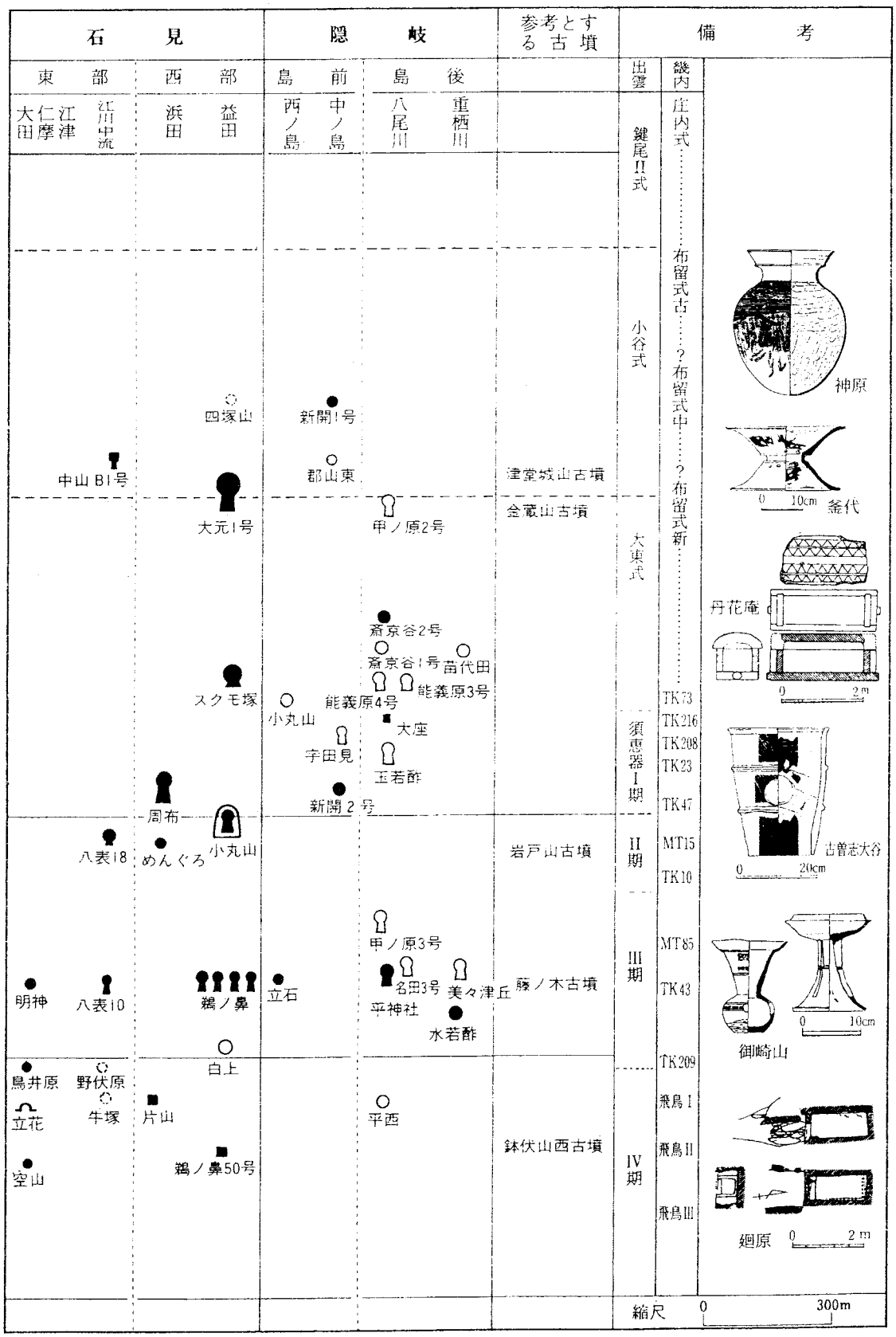
内部主体は墳丘の中央部に小型石棺２、木棺１が平行して存在し、中央の第１主体からガラス製玉小玉１６、第２主体からガラス製小玉１０・ガラス製管玉３が出土している。

周溝内には棒状の河原石を用いた径１．５ｍ～２．５ｍのストーンサークルが３基存在している。この周辺から粉砕された土器片が出土していることから、墳墓祭祀に関係するものと思われる。

築造時期は弥生時代後期と考えられ、現在のところ確認された島根県最古の四隅突出型墳丘墓である。また、日本で最初に発見された四隅突出型墳丘墓でもある。




年
出雲
東部
飯梨川以東
飯梨川以西
中部
松江南部
松江北部
講武
宍道湖北岸
宍道湖南岸
西部
斐伊川
神戸川
宍道湖西岸
内陸部
斐伊川中・上流
前期
前葉
中葉
後葉
中期
前葉
中葉
後葉
後期
前葉
中葉
後葉
500
600
700
終末期
大成
塩津山1号
造山1号
造山3号
寺床
名分丸山
八日山
奥才13号
釜代
奥才14号
山地
大寺
神原
松本3号
松本1号
椿谷
大垣大塚1号
大垣大塚2号
毘売塚
宮山1号
廻田
井ノ奥1号
丹花庵
菅田丘
中ノ空
古曽志大塚
報恩寺
北光寺
軍原
石屋
井ノ奥4号
大源
金崎
古曽志大谷
扇廻
神庭岩船山
宮山3号
向山西
鶏塚
竹矢岩船
今若峠
造山2号
乃木二子塚
奥才1号
天神原
仏山
山代二子塚
薄井原
林43号
上島
古天神
御崎山
妙連寺
大念寺
半分
椎山
神代塚
岡田山
東淵寺
岩屋後
放れ山
築山
刈山5号
三代
穴観
高広
鷺ノ湯
伊賀見
平ヶ廻
岩屋
塩津
団原
山代方墳
上塩冶
地蔵山
中山
22-1
飯梨岩舟
永久宅後
若塚
廻原
鏡北廻


石見
東部
西部
隠岐
島前
島後
参考とする古墳
備考
大田
仁摩
江津
江川中流
浜田
益田
西ノ島
中ノ島
八尾川
重栖川
出雲
畿内
鍵尾II式
小谷式
大東式
須恵器I期
II期
III期
IV期
庄内式
布留式古
?布留式中
?布留式新
TK73
TK216
TK208
TK23
TK47
MT15
TK10
MT85
TK43
TK209
飛鳥I
飛鳥II
飛鳥III
四塚山
新開1号
郡山東
中山B1号
津覚城山古墳
金蔵山古墳
大元1号
甲ノ原2号
斎京谷2号
斎京谷1号
苗代田
能義原3号
能義原4号
スクモ塚
小丸山
大座
宇田見
玉若酢
新開2号
周布
八表18
めんぐろ
小丸山
岩戸山古墳
甲ノ原3号
名田3号
美々津丘
平神社
水若酢
明神
八表10
鵜ノ鼻
立石
藤ノ木古墳
白上
鳥井原
野伏原
立花
牛塚
片山
平西
鉢伏山西古墳
空山
鵜ノ鼻50号
神原
釜代
丹花庵
古曽志大谷
御崎山
廻原
縮尺
0
300m
0
10cm
0
2m
0
20cm
0
10cm
0
2m